

書評 梶田孝道・丹野清人・樋口直人著
『顔の見えない定住化—日系ブラジル人と
国家・市場・ネットワーク—』
(名古屋大学出版会、2005 年)

江成 幸・津野地 幸子・オチャンテ ロサ

1. はじめに

国際労働移動がもたらす社会現象への関心は、1990 年代に日本において一気に高まった。社会学の領域でも、多くの事例研究とモノグラフが蓄積されている。本書は独自の調査データをもちい、理論的アプローチに重点を置いた試みである¹⁾。

本稿は、前半の 1 節～6 節および 9 節むすびを江成が担当し、全体をつうじた成果と課題を検討する。後半の 7・8 節は、われわれの関心と重なる章を取りあげる。津野地が日系人の社会的ネットワークに関する第 8 章について、オチャンテが第 10 章を中心に定住化と日系人家族をめぐる分析について、それぞれ要約しコメントを付す。

2. 本書の概要

本書は三部構成であり、第Ⅰ部（1 章～3 章）では欧米の研究を豊富に引きながら、副題にある国家、市場、移民ネットワークという視点を提供する。第Ⅱ部（4 章～8 章）は、この三つの問題設定にそって、日系ブラジル人の来日と就労をめぐる実態を明らかにしようとする。とりわけ、第 6 章から第 8 章にかけては、著者たちが「顔の見えない」と呼ぶ状況に関心が向けられている。

第Ⅲ部（9 章～11 章）は、外国人労働者の日本社会への適応にかかわる議論へと進む。国内の先行研究を批判的に紹介しながら、日系ブラジル人と地域社会のかかわりについて、政策面を含めて論じている。

広範な問題意識は、3 人の共著によるところが大きい。梶田孝道は、以前からヨーロッパの地域エスニシティにかかわる理論を紹介し、近年では日本の外国人労働者問題についても執筆を行っている。この分野で代表的な氏の著述は、一定の社会的影響力をもつと考えられる。丹野清人と樋口直人は、本書が依拠する日系ブラジル人研究プロジェクトを実質的にまとめた気鋭の研究者である。

3. おもな論点

章立てには、執筆者 3 人が入りくんで参画している。梶田は、第 1 章で国民国家が現代の移民にどのように対応しているか整理し、第 4 章で日系人が日本の在留資格に組み込まれた経緯に関する解釈を示している。樋口と共著の第 10 章は、量的調査データを用い定住化の議論を

検証している。

丹野はまず第2章で、日系人労働者の立場をあぶりだすために、企業の論理に注目する。第6・7章では、業務請負業への聞き取りをもとに、国内における日系人労働市場の詳細な見取り図を示し、さらに第9章で、地域社会への影響を分析している。

樋口は、第3章で国際移住ネットワークに関する欧文の理論を紹介し、第5章でブラジルから日本への移住を理論化しようとする。また第8章は、来日した日系人の社会的ネットワークの結節点として、企業家にスポットをあてている。第11章は、地域社会における政策課題に言及した終章となっている。

4. 本書の意義

序章および第I部理論編で扱われるネーションフッドの再定義（1章）と移民ネットワーク論（3章）は、海外の研究動向をふまえて、わかりやすい分析視角を提供している。「日系ブラジル人」という多様性をもった集団についても、法的・政策的側面としては「日系人」、就労・生活実態としては「ブラジル人」と呼ぶ視点はあざやかだ（p.3）。外国人労働市場（2章）に関しては、第II部で当該テーマを扱う際の、筆者独自の分析の枠組みとして位置づけられよう。

移民とネーションのかかわりは、従来から和文献も多いが、本書では最近の動きと日本についての考察を加えており、専門家・初学者とも参考とすべき内容である。移民ネットワークに関しては、これまで海外の研究を包括的に紹介したものは少なかった。送り出し国と受け入れ国の双方を視野に入れた研究として、注目すべきアプローチといえる。

第II部と第III部は、梶田を代表とする研究プロジェクトが収集した日系ブラジル人労働者に関するデータを活用している。巻末の補遺には、1990年代末を中心とした調査時期や規模など、データの概要が示されており、本書を参考にする専門家にとって好ましい配慮といえる。特に2千人の労働者データは、業務請負業を通じた配布という限定はあるが、国内では例がないと思われる。

本書の特徴は、先行モノグラフはあくまで参考とし、自前のデータを理論的関心のもとに分析し、政策的議論を進めていることである。ブラジル人労働市場のなかのさらなる階層性の抽出（6章）や、ブラジル人の家族以外のネットワークが本国からの移植ではなく、日本で再編成されていること（8章）など新しい発見があった。

5. 「顔の見えない」のはなぜか

タイトルの「顔の見えない定住化」は、インパクトのあるフレーズである。複雑な構成をなす本書を精読するにあたり、このキーワードが何を指し、どんなメッセージを読者に送っているのかを理解することは重要であろう。

はじめ、タイトルだけ見た感想はこうである。「顔の見えない」は、同じ日本社会で生活していながら、日本人の側から日系ブラジル人の実態が見えにくいという意味ではなだろうか。だとしたら、一般世論と判別のつかない生硬な形容ではないか。また彼らを「顔の見えない」存在とステレオタイプ化することにつながりはしないか、と。

実際に読むと、主眼は労働市場の様態など、「見えない」状況を生む仕組みにあるようだ。「顔の见えない定住化」は、長時間労働と配置換えの転居により、「外国人労働者がそこに存在しつつも、社会生活を欠いているがゆえに地域社会から認知されない存在となること」と定義されている（p.72）。すなわち、企業が需要に即応するため、請負業を介して労働力を調達することで派生した現象ととらえている。このように企業にとって安価な、社会保険に加入させない雇用形態は、手取りが多いことから、労働者にも歓迎されたと指摘している（p.181）。

さらに移民コミュニティの形成に関しても、上記の市場が強いる国内移動に規定される側面が明らかになる。ブラジル人労働者は、日本人から見えにくいのみならず、ブラジル人同士でも「顔の见えない」状態が起きているという（p.211）。わずかに、集住地域でビジネスを始めた企業家リーダーついて、「顔の見える」存在への可能性が示唆されている²。

いずれも労働者の疎外という古典的テーマにつながる問題だが、ブラジル人のインフォーマントたちは、自らの立場や日本社会からの断絶についてどう感じているのだろうか。滞日ブラジル人の集住地域を歩いて調査した書き手だけに、彼らの大多数である労働者の生きた表情が伝わってこないことが惜まれる。

たとえば、最終章で引かれるゴードンの「エスクラス」の概念は、著者の指摘通り、不安定就労の労働者かつ外国人という条件の分析に有効であろう。分析の早い段階に入れ込めば効果的であつたろう。同様に、市場の支配にとらわれない方策として、互酬的関係が提案されているので、具体的にどのようなチャンネルがあるのか、今後の研究に期待したい。

本書が重視する労働市場論および政策論は、来日ブラジル人の置かれた状況を理解する基礎といえる。他方で、これまで国の施策が届かない実情のなかで、家族の適応や教育の分野では、日本人支援者を含めた地域レベルの市民参加も支えとなっている³。したがって、本書が共生概念の代替として提案する統合の具体的なすがたについては、研究者のみならず、行政、ボランティア、ブラジル出身の人々の主体的な声により、理念的コンセンサスを構築する必要があるだろう。

6. 「定住」に関する定義と分析の拡散

本書では「定住」に関するフォーカスが二つある。一つは、日系ブラジル人とその家族の労働者としての来日・就労・居住の現状を構造的側面から分析することで導かれた「顔の见えない定住化」という文脈で、おもに6、7、8章で扱われている。この場合、日本での滞在が長期化する傾向には疑問をはさんでいない。問題としているのは、請負業者を介した雇用の流動性から、日本国内での移動が多いことであり、「日本人住民から見ると、突然見知らぬ住民が増えたり減ったりする光景」（p.201）に象徴される。

一方、4章および10章の労働者データの分析では、来日中のブラジル人にアンケートで滞在予定を尋ね、その結果から帰国の可能性が高いという予測を導いている。前者は日本での定住化傾向を認めて分析の前提とするが、後者は定住化傾向そのものを疑問視する。ホスト国内にとどまるかどうかという本書の核心部分で、論調のぶれが起きている。

その背景として、章によって論考時期が前後している点に留意すべきだろう。補遺とあとがきによれば、ポルトガル語で滞日予定などを聞いたアンケートは1998年に実施され、本書は1999年発表の報告書を書き直し加筆したものである。2005年出版の本書でも、数年前のデー

タに依拠し、当時のままの状況認識で書かれている箇所が見受けられる⁴。

だが、数年の経過がいかに新たな課題をつきつけるかは、子どもの教育に関して 2000 年以降の情報を多用した 9 章にうかがえる⁵。評者が知る例として、三重県下のある地域では、行政やボランティアが家族での長期滞在を予測したサポート体制をとり、高校・大学への進学者が増えつつある⁶。このような現実に応じた現場の認識と、とりわけ第 4 章の基調をなす現在進行形の諸問題からの距離感は、鋭いコントラストをなしている。本格的来日開始 10 年という節目から、さらに 5 年間の状況の変化について、より詳細に論じる余地があったと思われる。

7. 移民コミュニティを概観して

第 8 章「移民コミュニティの形成？—社会的ネットワークの再編成をめぐる—」では、ネットワークと社会的資本の蓄積の観点から、在日ブラジル人のコミュニティはどのようにして形成され、どのような特質を持つのかを多くのデータをもとに論じている。エスニックビジネスやアソシエーションなど、デカセギ・ブラジル人の実生活を具体的なケースを通して分析しているため、実態を容易に想像することができ入りやすい内容である。

第 1 節では、コミュニティの形成原理に関する理念型を示している。移住システムと移民コミュニティの関係を「顔の見えない定住化」、「コミュニティの再編成」、「上からのコミュニティ形成」、「トランスナショナルなコミュニティ」の 4 つに類型化し、移民コミュニティで最も重要な資源である社会的資本は、類型ごとに異なる形で蓄積されていくことを示している。本章を執筆した樋口自身、現実のコミュニティはひとつの原理からのみ成立しているわけではないとしているが、押さえておきたい理念型である。

第 2 節では、エスニックビジネスと社会資本、そして社会的ネットワークの再編成を焦点としている。ブラジル人コミュニティで形成されているネットワークは、出身地から持ち込まれたのか、それとも日本で新たに形成されたのか、そして、どのようなネットワークがどのような社会的資本を生み出したのかを論じ、ここでは、エスニックビジネスの企業家に焦点を当て分析している。

ブラジルから持ち込まれたのは、学歴とビジネス経験という人的資本であり、必要な資金のほとんどは日本で調達されていることがわかっている。そこから、社会的資本を生み出したネットワークを、①ブラジルから持ち込まれたネットワーク（家族、親族、友人）②日本に移住してからネットワーク（近隣、同僚、日本人）というように分節化している。日本のブラジル人が持つ社会的ネットワークは移住後に再編成され、金銭の提供は、信頼が高くつながりが強い家族から、そして信用の提供は、紐帯は弱いがビジネスを始めるのには必要な日本人からというように、性質の異なる紐帯を目的に応じて選択していることがわかる。樋口は日本人からの信用の提供を「異質な紐帯」と記している。この異質という表現には違和感を覚えたが、日本人からの信用の提供という意外さを表すには適当かもしれない。つまり、多くのブラジル人は、自分の持ち合わせている社会的なつながりを用途に応じて有効に使っていると分析されている。

第 3 節では、エスニックビジネス、宗教の発展、制度の利用と制度への参加を具体的なデータをもとに示し、ブラジル人コミュニティは、エスニックビジネスと宗教を中心に発展してきたことを前提に、両者の成立と広がりからコミュニティを見ている。ブラジル人コミュニティ

は市場媒介型移住システムに規定されており、「顔の见えない定住化」か「コミュニティの再編成」のうち、どちらの類型に近い形でコミュニティ形成が進んでいるのかを論じている。そして、前節では企業家に焦点を当てていたが、より大多数を占めるブラジル人労働者がどの程度コミュニティの制度と関わりを持っているかを分析している。

ビジネスの発展としては、実生活に密着したビジネスから趣味・娯楽のビジネス、高価なものを扱うビジネス、そして企業相手のビジネスという変遷があることを示している。ビジネスの種類の増加とともに、ブラジルでのビジネス・技能を再現するものが現れ、ビジネスの拡大につれてコミュニティのリーダーが現れており、企業家が育んだ連帯がコミュニティの供給に貢献していると樋口は分析しているが、ブラジル人企業家は全体数の中で少数者であり、人脈など恵まれた人であることを忘れてはならない。ブラジル人同士でも企業家と労働者の間に、少なからず軋轢があることも考慮しなければならないと考える。

宗教の面から見ると、ブラジル人にはカトリック信者が最も多く、教会や日本の宗教組織は、外国人支援の最大の基盤となっており、制度の供給は外部からもたらされていると分析している。特定の居住地域でコミュニティに属していなくても、教会という媒介を通じてコミュニティを形成しており、教会など宗教関係団体は重要な役割を担っていることが分かるため、宗教を視点にした在日ブラジル人の研究は更なる成果があげられるものと考ええる。

また、顧客として利用する「エスニックビジネス」、メンバーとして参加する「アソシエーション」のそれぞれの状況において、家族体系、学歴、日本語能力など人的資本にさまざまな傾向が表れていることがわかる。エスニックビジネスが供給する商品を消費することで、自らはブラジルの生活を維持しながら適応の圧力を緩和し、ビジネスを支える役回りを演じることになる。アソシエーションは、日本の生活に慣れると「卒業」するようなものではなく、むしろ安定や生活の余裕を反映する活動であると樋口は述べている。

確かにその通りだが、ある程度余裕が出てきて何らかの活動に参加するのはブラジル人コミュニティに限ってのことではなく、日本のコミュニティにおいても見られることである。日本人でも新来住民や若者など、コミュニティに対しては消極的な層も存在する。特に、積極的な活動をする人はいくつかの活動を重複して行っており、積極的な人と消極的な人との態度や意識の格差も問題であるように思う。ブラジル人コミュニティと日本人のコミュニティを全くの別物として考えずに、参考にし合う必要もあると思われる。

最後に樋口は、コミュニティの形成が社会的資本の蓄積につながり、日本社会で彼らがおかれた不利な状況の改善に至る可能性を検討している。この課題に対して社会制度、エスニックビジネス、アソシエーションの3点をふまえて、ブラジル人はデカセギ後に家族以外のネットワークを構築しなければならないとし、エスニックビジネスが日本人社会と移民コミュニティの緩衝材として果たす機能を重視すべきであると述べている。

この章のタイトルに「？」が付いているように、コミュニティの形成は単純なものではない。それは、エスニックビジネスの上客となるのは短期滞在志向で帰属意識が弱く、日本語能力も低い流動的な層であるため、エスニックビジネスを通じたつながりが、持続的な関係構築を通じて社会的資本のインキュベーター（培養器）になるとは考えにくいという分析からである。来日して間もないブラジル人や、移転したばかりの人にとって、エスニックビジネスの存在は精神的な安心を得るために大きなものであるだろう。それに加え、エスニックビジネスとアソシエーションのつながりを持たせることができれば、更に諸問題に柔軟に対応できるコミュニ

ティの形成につながるのではないだろうか。

樋口はブラジル人のコミュニティを氷山に例え、日本人側からはほとんどが不可視の状態であると述べているが、まずは制度から接近し、徐々にコミュニティの内部と通じて行くのは意義のあることと思う。この章は、最初にも述べたが、具体的な生活に基づいた調査データ、写真などがあり、専門分野外の者にとっても大変入りやすい。この章を通じて他の章への関心が湧くと言っても過言ではない。特に宗教やエスニックビジネスを通じてのコミュニティの形成は日本人の感覚では分かりにくく、気づきにくいので、少しでも氷山の不可視の部分に近づくことができたのではないだろうか。短い章の中に、宗教・ビジネス・アソシエーションなど多様なテーマがでてきたが、これらをひとつひとつ分析していくのも非常に興味深い研究であると思う。

（7 節担当：津野地幸子）

8. 滞日見通しをめぐる一考察

第10章「一時滞在と定住神話の交錯—ブラジル人労働者の滞日見通しをめぐる—」では、労働者データの分析を通じて、「定住化」をめぐるブラジル人の意志と行動に迫っている。

はじめに筆者は具体的なデータを基にして、「日系ブラジル人の大多数は短期滞在を前提として来日している。さらに日本での今後の居住予定として5年以内の短期と『わからない』が多い」（p.260）と述べている。これによって日本での在住をあくまでも出稼ぎと考えていると強調している。たしかに、多くの日系労働者は日本に来る最初の目的を短い間にお金を稼いで、帰国することと考えている。それが、時間が経つにつれて「居住予定がわからない」に変わっていくことになるのではないかと思われる。しかし、わからないと思いつけている間に時間が経ち、入管法改正から15年経った今では、日本で定住することを考え、家を買ったり、日本の日系社会で生活しようと考えている人が増えていると考えられる。そのため、筆者の日本での在住をあくまでも出稼ぎと考えているという解釈に疑問が残った。

第1節では、多様な構成員からなる集団であるブラジル人が抱いた、移住の動機や担い手のバリエーションをみている。ここでは、性別や学歴によって移住動機が異なる。しかし、学歴が低い人ほど、ブラジルの状況が悪いために、「苦しい状況下での緊急避難的なデカセギが多い」（p.262）という筆者の言い方は疑問に思った。確かに、ブラジルは経済的に厳しい状況に置かれているが、日系ブラジル人の場合は、ブラジル社会においては平均的なレベルでの生活をしており、贅沢なものがないとしても、食べることに困ることはなく生活できていた。ブラジルで生活ができないから来日したというより、日本で収入を増やして、ブラジルで個人の夢の実現や、さらなる生活の向上を目指していると思われる。そのため、「緊急避難的なデカセギ」という言葉は母国での生活が成り立たなかった印象を与え、適切ではないと思われる。

担い手の広がりや滞日見込みに関して筆者は、年を追うごとに新規来日者の学歴が下がっていることを示す。「若年層にとって、高校や大学への進学に代わるオプションとしてデカセギが浮上した結果、担い手が年齢的に広がったと考えたほうがよい」と述べている（pp.266-267）。これは指摘通り、残念ながら大きな問題と考えられる。何も勉強しなくても、たくさんのお金を日本で稼げるため、頑張って勉強する必要がないと思い始めている青年が増えている⁷。

ここから本書の定住化に関する立場と、日系人家族をめぐる分析について、評者の考えを加えながら検討していく。第2節「滞日経験と滞在長期化」では、「ターゲット・アーナーとし

ての性格が最も強い居住予定2年以下の者がもっとも消費活動を活発に行っている」と述べている(p.270)。この点に関し、評者の印象でも、「居住予定」2年以下の者は国へ帰ろうとする気持ちが強い、母国で贅沢なものとして買い求めることが難しかった車、電気製品、アクセサリー等を日本に在る間に買って母国に持って帰ろうと考えているのではないだろうか。日本の方が最新型の電気製品や車が、ブラジルより安く買えるからだと思われる。しかし、決まっていた目標を達成できず、居住予定が延び、時間が経つにつれて日本で永住しようと考えはじめるのではないか。

第3節は(1)「滞日見通しの規定要因」として、筆者はまず、定住する意志を固めたブラジル人は、まだまだ少数派でしかないと述べている。また、データの結果では日本に子どもがいる場合についてのみ、長期の滞日見通しと有意な相関があることを示す。親やキョウダイといった「子ども以外の家族がいることで滞日基盤の強化、ひいては長期的な滞日見通しには至らない」(p.278)と、筆者は、ブラジル人の定住化は実現しがたいと感じているように思われる。

第3節(2)「滞日ブラジル人の分岐と定住化」では、これまで分析を行ってきたなかで、定住化を考えるうえで重要な三つの層を析出している。第一グループは、不動産の購入やビジネス資金などを獲得する目的で、1年から5年の就労を予定していた人々である。予定を変更してリピーターとなる者や、なかには日本に残って就労を続ける者もいて、主観的な滞日意識と客観的な滞日期間のずれは今後も拡大する可能性が高いとみている。

第二は、数こそ少ないが、当初から長期滞在を予定するグループである。日本に子どもがいる比率が高く、従来の定住化モデルに最も合致するグループである。第三は、来日動機も曖昧で、来日時の滞日期間も定まっておらず、今後の滞日予定に関する見通しもないグループであるが、「日本に今後も住み続ける可能性はかなりあるだろう」(p.279)と解釈している。

オチャンテが行なっている調査では、1990年の改正入管法施行後初来日し2、3年の滞在を予定していたブラジル人の中に、14年以上日本に住んでいる者も多くみられる。したがって本書のデータで最初に1年から5年の就労を予定している者でも、これはおそらく居住予定に過ぎないと考えられる。

この三つの層に関する筆者の解釈をみれば、ブラジル人の定住化は時間の経過によっては可能性があると感じさせるが、「おわりに」では定住化への否定的な考えを強調している。筆者は、先行例から「一時的移民も時間の経過とともに定住化するという発想」(p.280)には同調しない立場をとる。定住化が起きた欧米の先行例については、「意図せざる結果」だったとする。さらに、「『意図せざる結果』が山ほど存在するからといって、すべてを定住化必然論でみることはできない」(p.280)と強調している。また、ブラジル人の場合、定住化必然論の枠に収まりきれない要素の1つとして、「日本人の配偶者等」や「定住者」である日系人は、いつでも出入りが自由であり、それを規制することはできないため、定住化の必要は遠のくことになる」と主張している。この解釈は曖昧であると感じた。逆にいつでも国に帰れるので、安心して日本に暮らし、母国に旅行として帰ろうと思う人もいるのではないだろうか。

章の締めくくりでは、子どもに限ってのみ、長期化した場合の問題を取りあげている。将来その数は、著者の予想をはるかに上まわるであろう。日系ブラジル・ペルー人の中高生にこれから日本で生活していきたいかどうか、オチャンテが調査で聞いたところ、ほとんど子どもは、親が母国へ帰るとしても、自分は日本で生活していくと強く確信している。おそらく、日本で長く生活し、日本の学校に通ったことがある子どもは、日本との何らかの繋がりができ、日本

に定住化しようと思うようになるのではないか。子どもたちは、ある時期まで親に従いながら、ブラジルと日本に行ったり来たりすると思われるが、ある年齢になれば、日本で自分たちの社会を作り、日系社会という環境で生活をしていくだろうと考えられる。

同じ箇所では著者は、親の仕事場が変わるのに伴って教育面の移動を強いられており、「子どもの教育を従属変数とした形でデカセギが続く限り、子どもはその犠牲者となりやすい」（p.283）と述べている。この表現は、子どもの教育問題を全て親の責任に帰しているような印象を与えてしまう。第6章で明らかなように、日系ブラジル人が頻繁に会社を変えるのは、ただ単に高い給料がもらえるからではない。背景にはもっと深刻な問題があることを指摘しておきたい。

この第10章を日系人問題について、知識のない読者が読めば、定住化を疑問とする筆者の表現の仕方に影響を受けるかもしれない。表が多くわかりやすかったが、報告書（1999年）に掲載された質問紙の内容は表面的なものであり、事実の確認や単なる予定を問うものである。この調査だけでは、ブラジル人の定住化を否定することはできないと思われた。より深く母国の状況や家族のニーズなど、滞在期間に影響を与える要素や心理面を細部まで尋ねる必要があったのではないだろうか。（8節担当：オチャンテ ロサ）

9. むすび

本書は、ブラジルからの「デカセギ」を構造的側面から分析する姿勢でほぼ一貫している。しかし、本稿が注目した定住化に関しては、アンケートに回答した労働者の主観的傾向を分類するにとどまっている。「今後の滞日期間がどれくらいになるかわからない」といったアクターの態度について、構造的に切り込んではいない。にもかかわらず、帰国する者が大半で、定住化の進行についてのシナリオは当面描けないかのような断定がみられる。

第1章で日本に「外国人の管理政策はあっても統合政策はない」（p.42）という重大な指摘がなされているだけに、一度かぎりの量的調査の結果に依拠するあまり、問題を将来に先送りする結果になりはしないか気がかりである。主著者である梶田氏の国際社会学における数々の業績から学んできた者は多く、研究者・学生はもちろん、行政関係者や一般の人びとまで幅広い読者をもつと思われる⁹。教育や生活関連分野の施策が何年か停滞するといった事態を招かないために、このテーマに関心のある読者は、本書の各論に内在する視座の違いに注意を払い、異なる仮説に立つ他の調査研究をあわせて参照するとよいだろう。

本書は、海外の移民・エスニシティ研究に精通した研究者たちが、日本における日系ブラジル人の実態を調査し、現状把握に奮闘しながら、目標とする理論的分析に至った労作である。モデルとなる研究スタイルであり、外国人労働者とその生活をテーマとする国内の社会学的研究にとって、大きな知的インパクトを与えたことは間違いない。本書では、刻々と変化のただ中にある現象や問題も多く取り上げており、今回の調査から10年後、20年後の継続調査と分析を望みたい。（1～6節、9節担当：江成 幸）

註

- 1 既出の書評として、たとえば小内（2005 年）がある。
- 2 ただし、「顔が見える」にはアントレプレナーシップが要件か、という評者らの疑問に対し、該当箇所を執筆した樋口氏からは、企業家であることと顔が見える定住化には高い相関があるが、必要条件でも十分条件はないという回答が寄せられた。
- 3 本書では第 9 章に、わずかながら地域の NGO の事例が紹介されている。
- 4 本書のベースとなった報告書におけるデータ解釈について、評者はこの分野の研究をレビューした際に検討したが、第 4 章の「何度も出稼ぎを繰り返すリピーター」（p.130）という見解には懐疑的である（2002 年、pp.139-142）。
- 5 なお、第 9 章で引用の「表 9-1 不就学の状況」（p.242）は出典を明確にしていないが、2002 年の外国人集住都市会議資料と合致している（『多民族文化社会における母子の健康に関する研究』班、p.46）。この表の段階では、依然多くの自治体が、実態を十分に把握しないまま高い不就学率を報告していた。鈴鹿市のデータが不正確で大幅に高率だったことについては、藤本美知代氏の指摘による。可児市で実施された調査によると、2003 年度の外国人の不就学状況は前期 4.2%、後期 7.2%であった（同、p.7）。
- 6 三重県伊賀市（旧上野市）における日系ラテンアメリカ出身者の教育問題に詳しい藤本久司氏、藤本美知代氏による 2005 年現在の話。
- 7 コガも、「日系子弟が自らを出稼ぎ者として意識するようになることも彼らを教育の現場から遠ざける原因である。また、ブラジルの日系人の教育レベルは全体的に低下していると言わざるをえない」と述べている（1998 年、pp.80-81）。
- 8 本書の影響の一端として、学会誌の研究動向で、定住化を疑問視する説にやや重きを置く論調がみられた（山田、p.507）。

文献

- 江成幸『『定住化』と『共生』をめぐる課題—ラテンアメリカ出身日系人—』駒井洋編著『国際化のなかの移民政策の課題』明石書店、2002 年、pp. 131-159。
- 小内透「書評『顔の見えない定住化』」『図書新聞』2005 年 6 月 18 日号、5 面。
- 梶田孝道研究代表者『トランスナショナルな環境下での新たな移住プロセス—デカセギ 10 年を経た日系人の社会学的調査報告—』一橋大学社会学部、1999 年 7 月。
- コガ、エウニセ A. イシカワ「来日日系ブラジル人子弟の教育とアイデンティティー出稼ぎ現象の中の子どもたち」『年報社会学論集』第11号、1998 年、pp. 71-82。
- 「多民族文化社会における母子の健康に関する研究」班『共に育むふれあい交流都市をめざして—岐阜県可児市の歩み—』可児市、2004 年 3 月。
- 山田信行「分野別研究動向（国際）—『国際化』から『グローバル化』へ：『国際社会学』に求められるもの—」『社会学評論』222（第 56 巻第 2 号）、2005 年、pp. 500-517。